

「張良吹簫図」考

— 北斎「張良図」の補説 —

A Supplementary Study on “Zhang Liang Playing the Xiao flute”

張 小 銅

Zhang Xiaogang

一、はじめに

江戸時代には、張良を題材とする絵が数多く描かれていた。よく見られるのは「黄石公と張良」、「蒼海君と張良」などがあるが、中には葛飾北斎の肉筆絵「張良吹簫図」（寛政戊午〔10年、AD.1798〕、縦82cm×横31.1cm絹



図版1：「張良吹簫図」
（個人所蔵）

本、個人所蔵）が異色の存在である。この作品はもともと画題がないため、永田生慈氏が「張良図」と名づけた。ここでは筆者がより作品の内容を明確にするために名づけて「張良吹簫図」としたい。

永田氏の研究によると、「張良吹簫図」は『通俗漢楚軍談』の描写により描かれたものであるという。¹⁾ その根拠は『通俗

漢楚軍談』卷十二「張良吹簫散楚兵」にある次のような描写がある。²⁾

韓信は九里山に大軍を伏せ、十面より攻圍けれども項王の勇力甚だ壯にして生どり得ざりしかば、急に李左車を召て相議しけるは、項王の英勇萬夫も當がたし、我明日は合戦をせず、只九里山の四面に多の戰車を以て取圍み、遍く旗幟を立大軍を伏て相待ば、一日の内に楚の陣兵糧盡て自然に騷亂せん、縦ひ逃去んと欲すとも、彼戰車をさへられて出んとするも叶はず、守んとするも糧なくんば安ぞ亡ざることを得ん、是古の所謂の内無糧草外無救兵なり、若たゞ此と力を争んとせば、徒に軍馬を傷て甚だ良策にあらじ。（中略）張良が曰、これ何の難ことか有ん、只楚の諸將の心を懈しめ八千の子弟を分散せしめば、項王一人の力安ぞ久しく持ことを得ん、必ず十日の内には擒と成て天下自然に定ん。韓信手を打て申けるは、奇なる哉奇なる哉、某も向に李左車と此事を議したりしが、只此計を行べき人なし、先生必ず深き慮あらん、如何しか楚の將士を離散せしむべき、願は早く之を教よ。張良乃ち二人が前に近く居寄て密に申けるは、我少かりし時下邳と云處に遊で一人の異人

に逢けるが、此人よく洞簫を吹、その聲悠揚として呂律哀切なり、我終日共に酒を飲で簫を習ければ、一月ばかりを經て了に其妙を學び得たり、異人常に語けるは、此簫は乃ち古樂にして源黃帝より始れり、竹を截て筒として長一尺五寸、五行并に十幹十二支を按じ、八音克諧て以て天地を和ぐ、乃ち中呂の氣なり、其後大舜簫を改め造て、其形少し變れり、曾て秦女弄玉仙人蕭史と云人簫を吹て、二人共に名譽を得たり、常に此簫を吹ば鳳凰來儀し孔雀白鶴階の前に來り舞、されば又よく人の心を感激して、心に樂ある人之を聞ては彌樂み、憂深き人之を聞ては益悲を増、關外の旅人は轉た望郷の涙を濺ぎ、深閨の孤婦はいとど遠塞の征夫を思ふ、今秋の末に當て金風始て動き、草木黃み落て旅人故郷を思て情思尤も切なるの時なり、某夜ふけ人鎮て後雞鳴山に上り、此洞簫を吹て一曲をうたは悠々たる餘韻歌々たる悲聲、たれ人か之を聞に忍ん、楚の將士之を聞ば心中頻に悲を生じて元帥の弓を張、矢を放ことを用ず自ら散亂せん。韓信地に拜伏し、先生この妙藝あり、弄玉蕭史も及ざる所なりと云ければ、張良よくよく約を定て我陣に帰り。 (中略) 張良兼てより數百人に此歌を教へ、此彼に亂れ散て聲々に歌せ、自ら簫を吹て雞鳴山より九里山を上り下て數十返奏しけるが、其響清和にして甚だ悲く怨が如く訴が如く、一曲は高く一曲は下く一聲は長く一聲は短して五音亂ず、六律よく和で露の梧桐に落が如く、風の玎玲を送が如く、鶴の九臯に喉が如く、漏の銅壺に滴が如くなれば、之を聞人不觉の涙を抑かね、鐵石の肝腸も之が爲に摧け、勇烈の武夫も争で心を動さざらん。殊に今宵は月冷く風も身に入折なるに、其聲淒涼としていとど悲かりしかば、楚の陣中大將も士卒も之を聞に心亂れ、落

涙は雨の如く頻に故郷の方を詠やり、地の上に倒れ臥て口々に申けるは、是必ず上天我等を憐で命を救ん爲に神仙を下し、此洞簫に托して告玉ふならん、我等たとひ飢を忍び寒氣を凌て空陣を守るとも、若漢の兵一たび攻入ば皆忽ち死果て再び父母妻子の面を見こ能ず、又は上天の意にも逆なり、不如今宵月の明なるに乗じて早々に逃去ん、もし又漢の兵に捉れば乃ち天の教に任せ漢王に見て哀み告ん、料に漢王は仁徳深き君なれば必ず我等を害し玉はじ、豈空く此に餓死するに勝ずやとて諸人商議極りしかば、面々即時に行李の宮をなし、了に項王の命に従ず抜々に逃れ出て、半時ばかりに八千の子弟すでに十が八九は落失たり。

この描写を作品と照合すれば、画中の張良は雞鳴山の中腹で簫(實際は北斎の絵に「笙」となっているが、後に述べる。)を吹いている姿が見られ、遠方の山頂に一輪の満月がある。画面の下に楚と見られる軍旗があり、軍営中に人影が見られず、静まり返った雰囲気包まれている。悠々たる簫(笙)の音だけが山谷の間に響き合い、余計に人々の故郷への思いを引き起こす。疑いなく、この作品は文字の内容を再現したものに違いない。しかしながら、この作品を説明するにはこれだけでは足りない。ここで、筆者は二、三の補説を加えたい。

二、「張良吹簫図」における『西漢演義』と『通俗漢楚軍談』の影響及びその相異

ところで、前掲の『通俗漢楚軍談』十五巻二十冊は夢梅軒章峯と称好軒徽庵兄弟が明・甄偉の『新刻劍嘯閣批評西漢演義傳』(以下『西漢演義』と略す)に基づき翻訳したものである。中には夢梅軒章峯の序文(元禄庚午[3年, AD.1690]仲春)と称好軒徽庵の『訂正補刻繪本漢楚軍談』跋文(元禄甲戌[7

年, AD.1694])がある。元禄乙亥〔8年, AD.1695〕三月に京都の吉田三郎兵衛により刊行した。この本が刊行された経緯は弟の徽庵の跋文に見られる。次に引用しておく。³⁾

東道有一士。曾與亡兄章峯爲友，一日來訪之次，求記漢楚興亡之事，章峯辭而不肯，士請之益堅矣，於是不得已而將著此書十五卷也。及七卷成不幸，而章峯罹疾卒，其後士又携之來求于予續貂尾，予素才微而且多病，再辭三讓而不許。嗚呼妄言俚語眞雖不足發明玄旨，而繼亡兄之志，終其篇數以塞士之責。元禄甲戌暮春望京南徽庵謹跋。
(東に一人の士人がおり，かつて亡き兄章峯の友人である。ある日彼が訪ねて来た際，漢楚興亡のことを書くよう依頼した。章峯が辞退したが，その友人がますます強く説得するようになった。すると，仕方なくこの十五巻を著すはめとなった。途中七巻まで作ったが，不幸にも章峯が病死した。その後その士人がまた原稿を持ってきて，続けて完成するよう私に依頼した。私はもともと才能があまりないし，かつ多病だし，再三辞退したにもかかわらず，やはり引き受けざるを得なかった。ああ，俗の言葉や田舎のことばにて奥深い論理を究明することができないが，一応亡き兄の遺志を継ぎ，その十五巻を完成して責務を果たすことができました。元禄甲戌〔7年, BC.1694〕農曆三月十五日，京の南徽庵が謹んで跋文を記す)

という。すなわち，兄の章峯が友人に依頼され，断りきれなく引き受けた。そこで本書の翻訳に取り込み，途中七巻まで完成したが，不幸にも病気で亡くなった。後に兄の友人がまた訪ねてきて，本書の翻訳を完成するよう依頼した。結局断りきれず，亡き兄に続きその翻訳を受け継ぎ，なんとか終えることができたという。これによると，第八巻から二十

巻までは弟の徽庵が翻訳したのである。従って本文で議論の焦点を当てている第十二巻も徽庵の手によって施したものである。この第十二巻を見る限り，「翻訳」より，「編訳」の性格が強いことがわかる。次に北斎の「張良吹簫図」における両作品の影響及びその相異を見てみよう。

1. 『西漢演義』には「張子房悲歌散楚」というタイトルであるが，『通俗漢楚軍談』には「張良吹簫散楚兵」に変わった。前掲の内容を見る限り，徽庵が忠実にこの部分の内容を翻訳したのである。すなわちほとんど「吹簫」の話である。「悲歌」の話は主に次のような歌詞がある。⁴⁾

九月深秋兮，四野飛霜天。高水涸兮，寒鴈悲愴。最苦戍邊兮，日夜徬徨。披堅執銳兮，骨立沙岡。離家十年兮，父母生別。妻子何堪兮，獨宿孤房。雖有腴田兮，孰與之守。隣家酒熟兮，誰與之嗜。白髮倚門兮，望穿秋水。穉子憶念兮，泪斷肝腸。胡馬嘶風兮，尚知戀土。人生客久兮，寧忘故鄉。一旦交兵兮，蹈刃而死。骨肉爲泥兮，衰草濠梁。魂魄悠悠兮，罔知所倚。壯志寥寥兮，付之荒唐。當此永夜兮，追思退省。急早散楚兮，免死殊方。我歌豈誕兮，天遣告汝。汝其知命兮，勿謂渺茫。漢王有德兮，降軍不殺。哀告歸情兮，放汝翱翔。勿守空營兮，糧道已絕。指日擒羽兮，玉石俱傷。楚之聲兮，散楚卒。我能吹兮，協六律。我非胥兮，品丹陽。我非鄒兮，歌燕室。仙音徹兮，通九天。秋風起兮，楚亡日。楚既亡兮，汝焉歸。時不待兮，如電疾。歌兮歌兮三百字，字字句句有深意。勸汝莫作等閒看，入耳関心熟當記。(九月が深秋になり，野原のあちこちに霜が飛ぶ。高いところから流れた水も枯れてしまい，鴈の群れが鳴いて悲しそうな声である。最も苦しいのは辺境を守ることであり，昼も夜も落ち着かない。よろい

を着け、武器をとって出陣するが、亡くなると砂岡に骨を埋める。家を離れて十年になるが、父母と生き別れる。妻子がどうやって我慢できるだろう、孤独に家に住む。豊饒な土地があるが、だれとそれを守るだろう。近所の酒が醸成できたが、誰とそれを飲むだろう。白髪の姿で家の門に倚るが、遠くまでみつめる。幼い子供のことを思うと、涙が止まらない。胡馬が風の中で鳴き、故郷が懐かしい。人が知らないところで長く住み、どうやって故郷を忘れられるだろう。一旦交戦すると、戦死する。骨や肉が泥となり、草や堀の中に埋まるだろう。魂が彷徨い、落ち着くところがわからない。高い志がわずかで、滑稽に見える。この長い夜中に、いろいろ反省する。早急に楚軍を退散して、多くの犠牲が免れるだろう。私の歌が決して可笑しくなく、天の神様が私を命じて汝に告げるからだ。汝が天命を知るべき、間違いないように。漢王が仁徳があり、投降した兵士を殺さない。帰郷の気持ちを告げれば、逃がしてやる。軍営を守らないで、食料の通路がすでに絶たれた。近いうちに皆捕虜となり、死ぬしかない。楚の声が楚の兵士を退散し、私は六律の音を吹ける。私は丹陽に餓死寸前の伍子胥ではないが、漂母の飯を味わったことがある。私は燕国に礼遇を受けた鄒衍ではないが、簫を吹いて天地を変えることができる。仙人の声が九天まで達した。私の風が吹きあがり、楚が滅ぶ日だろう。楚が滅ぶと、汝がどうやって帰るだろう。時間が待たないが、飛ぶようだ。歌が三百文字で、どれも深い意味がある。汝と関係がないと思わないで、ちゃんと聞いてよく覚えておけ。）

この「悲歌」は『楚辞』の口調で「……兮，……。」という形で構成されている。後半「漢王有徳兮，降軍不殺」（漢王は仁徳があり、

投降の兵士は殺さない）云々の詩句は、楚の兵士に投降を勧める内容であり、明らかに張良が作った歌である。張良は「又令漢卒学此楚聲，隨處歌之」（また漢軍の兵士にこの楚の歌を学び、あちこちで歌わせる）と命令した。徽庵は「張良かね兼てより數百人にこのうた此歌ををし教へ、こゝ此かしこ彼にみだ亂れちつ散てこゑごゑ聲々に歌せ」と訳し、編集の痕跡が見えるが、より張良の思慮深い性格を際立たせた。⁵⁾

全体としては、「悲歌」より「吹簫」の方が細かく描写されている。従って項羽の武将周蘭と桓楚が泣きながら「楚兵被韓信用計，遍山吹洞簫數闌，吹散楚兵。諸將亦皆亡去。（略）」（楚兵は韓信の策略に騙され、向うが山の到る所で洞簫を繰り返して吹き、とうとう楚の兵士を逃亡させ、諸武将もみな逃げてしまった）と項羽に報告した。受ける側も「吹散楚兵」と表現し、「歌散楚兵」ではなかった。従って徽庵がこのタイトルを直してより原文の内容にふさわしいと思われる。言うまでもなく北斎はまさにこのタイトル通り、忠実に「張良吹簫散楚兵」という主題を表現したのである。

しかしながら、北斎の「張良吹簫図」は単なる徽庵の『通俗漢楚軍談』によるものではなかった。その構図は『西漢演義』の挿絵「張子房悲歌散楚」を真似たものであることを指摘しなければならない。ちなみになぜかこの挿絵は『通俗漢楚軍談』に見当たらない。「張良吹簫図」は「張子房悲歌散楚」と比べて、全体的に極めて似通っている。しかし、細部の描写は北斎のアレンジが見受けられる。たとえば、絵の下部には、「張子房悲歌散楚」には数人の兵士が武器を捨てて逃げ去った場面がある。それに対し北斎の「張良吹簫図」には楚軍の旗だけが描かれている。その変動の結果、画面で表現した時限が変わった。北

斎の絵には兵士たちがまだ規律を守り混乱の様子が見られない。すなわち楚兵が逃げ去る前の状況である。しかしながら、その対峙している中こそ、楚軍の兵士たちの間に漂っている重苦しい雰囲気がいよいよ強烈に伝わってくる。従って張良と楚兵たちとの間の心理的攻防が見事に表現できた。



版図2：「張子房悲歌散楚」
(明・甄偉『西漢演義』)

2. 細部の描写ではあるが、北斎の「張良吹簫図」は張良が吹いているのは簫ではなく笙である。簫と笙は全く異なる楽器である。簫については『西漢演義』にすでに詳細な描写があり、『漢楚軍談』にも

忠実に翻訳されている。⁶⁾
 このせう こかく みなもとくわうてい はしま
 此簫は乃ち古楽にして源黄帝より始めり、
 竹を截て筒として長一尺五寸、五行并に十
 かん つつ たけ きやうならび
 幹十二し支を按じ、八音克諧て以て天地を
 やわら ちうりよ そのちたいしゅん あらた
 和ぐ、乃ち中呂の氣なり、其後大舜簫を改
 つくり そのかたちすこ かは
 め造て、其形少し變れり。

黄帝の説はおそらく『呂氏春秋』巻五・古楽によるものである。もともと黄帝が伶倫に命じて、竹を切って、鳳凰の鳴き声に基づき律呂を定めるわけであるという。以下に引用しておく。⁷⁾

昔、黄帝令伶倫作爲律。伶倫自大夏之西，乃之阮隄之陰，取竹於嶰谿之谷，以生空窅厚鈞者。斷兩節間，其長三寸九分。而吹之以爲黃鍾之宮。吹曰舍少。次制十二筒，以之阮隄之下。聽鳳皇之鳴，以別十二律。其雄鳴爲六。雌鳴亦六，以比黃鍾之宮適合。黃鍾之宮，皆可以生之。故曰黃鍾之宮，律

呂之本。(昔黄帝が伶倫[音楽を司とる官職]に律を作るよう命じた。伶倫が大夏の西から阮隄の北まで嶰谿谷で竹を取り、中に穴があり、かつ厚さが同じのものを二つ節の間を切った。その長さが三寸九分である。吹くと黄鐘の宮の音となり、吹くことは「舍少」という。次に十二本の筒を作り、それを持って阮隄の谷の下で鳳凰の鳴き声を聞き、それに基づき十二律を定める。雄の鳴き声は六で、雌の鳴き声は六である。これを以て黄鐘の宮の音に適合するようにする。黄鐘の宮の音が皆生じることができる。故に黄鐘の宮は律呂の基本である)

『三才圖會』器用三巻には簫を「管簫」と「韶簫」に分かれている。次に解釈している。⁸⁾

世本曰、舜所造其形、參差似鳳翼。長二尺、爾雅編二十二、管長一尺四寸曰管，長尺二寸曰巢。(世本が曰く、舜がその形を造り、鳳凰の翼のようで、長さが二尺である。『爾雅』編二十二によると、管の長さは一尺四寸のが「管」といい、一尺二寸のが「巢」という)(明・王圻、王思義『三才圖會』器用三巻・「管簫」の条項)

舜作十管韶簫，長有二寸。(舜が十本の管の韶簫を造り、長さが二寸ある)(明・王圻、王思義『三才圖會』器用三巻・「韶簫」の条項)

『西漢演義』に張良が言及した仙人弄玉や簫史が吹いている簫は、明・王世貞『有象列仙全傳』巻二「簫史附弄玉」に挿絵がある。笙については『三才圖會』に次のような説明がある。⁹⁾

禮記曰、女媧氏之笙簧。說文曰、正月之音，物生。故謂之笙。十三簧列管匏中，施簧管端，宮管在中央，三十六簧曰笙，宮管在左傍，十九簧至十三簧曰笙。大笙謂之簧，小笙謂之和。爾雅笙十九簧曰巢，十三簧曰和。(『礼記』に曰く、女媧氏の笙簧である。説

文に曰く、正月の音であり、物から出たので、「笙」という。十三の簧管がひさご匏の中に配列され、簧が管の端に取り付けられる。宮管が中央に配置される。三十六個の簧が「竽」といい、宮管が左側に配置される。十九個から十三個の簧が「笙」という。大笙が「簧」といい、小笙が「和」という。『爾雅』によると、笙が十九個の簧が「巢」といい、十三個の簧が「和」とい

う）（明・王圻、王思義『三才圖會』器用三卷・「笙」の条項）

この笙は『有象列仙全傳』巻一「王子喬」の条項に描かれている。洞簫については『三才圖會』には説明がないが、『和漢三才圖會』には説明がある。次に見てみよう。¹⁰⁾

按洞簫未詳始於何世，唐朝盛用之。玄宗皇帝善吹之。長二尺或二尺五寸，長短不同，表有四孔。裏上有一孔，此非樂器，唯遊戲吹之和謠歌，本通一孔，管附綵絲以飾之。本朝不好之。一説云，洞簫乃簫之無底者。（案ずるに、洞簫はいつ出来たかがよくわからない。唐代に盛んに使われていた。玄宗帝がそれを吹くのが得意である。長さが二尺或は二尺五寸で、まちまちである。表には四つの穴があり、裏の上には一つの穴がある。これは楽器ではない。遊びに謡曲に合わせるための道具にすぎない。元一つの穴があり、色どりのひもを飾るためである。本朝では好まれていない。一説では、洞簫は底のない簫であるという）

要するに、洞簫は尺八に似ていて縦で吹く楽器で、一般に言われている簫の形とも全く異なる。しかし『西漢演義』には張良の口で「簫」について説明したが、次の描写に楚兵の口で「洞簫」という言葉が次のように使われている。¹¹⁾

此必是天遣神仙下降，救我等性命，故使吹此洞簫（下線は筆者），欲我等逃命。（『西漢演義』巻七）

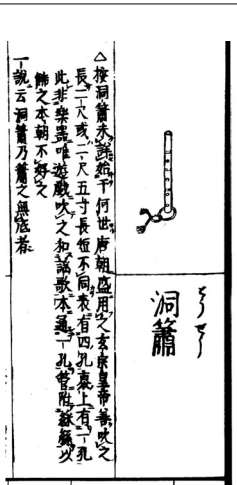
これに対し、『通俗漢楚軍談』が次のように訳されている。¹²⁾

是必ず上天我等を これ われら あはれん いのち すくは ためしん 憐 で命を救ん爲に神 せん 仙を下し、此洞簫に托して告玉ふならん。
（『通俗漢楚軍談』巻十二）

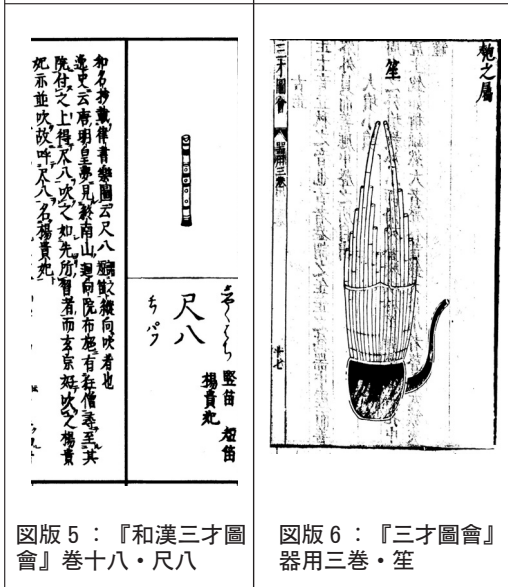
明らかに、『西漢演義』の作者が簫と洞簫の区別をしなかった。その結果として絵師たちに混乱を招いたのである。『西漢演義』の



図版 3：『和漢三才圖會』巻十八・笙



図版 4：『和漢三才圖會』巻十八・洞簫



図版 5：『和漢三才圖會』巻十八・尺八



図版 6：『三才圖會』器用三卷・笙

「張子房悲歌散楚」には張良が洞簫のような楽器を吹いている。一方「張良吹簫図」には北斎がなぜか「簫」を「笙」として描かれたかがよくわからないが、それは小説の原意には合わないのが事実である。北斎にはもう一枚の作品「張良簫を吹いて楚兵を散らす」(『通俗絵入楚漢軍談』挿絵、岩切友里子編『芳年「月百姿」』、明治17年〔1884〕出版)があり、やはり画題と異なり、笙を吹いている姿である。¹³⁾

ところで、『西漢演義』より七年早く刊行した『京板全像按鑑音釋兩漢開國中興傳志』(以下『中興傳志』と略す。)巻三「韓信連収趙燕二国」の節に次のような描写がある。¹⁴⁾

子房謂王曰、臣有一計使楚軍自散、楚王獨力難以當漢之衆、方可擒之。漢王韓信大喜。子房乃於山上高處吹鐵笛、作楚歌聲。楚軍聞者悉皆傷感。(張良が漢王韓信に「臣下が一つの策略があり、楚軍に自ら退散させる。楚王項羽が一人で漢軍の軍勢に敵えなくなる時に、捉まえることができる」と進言した。漢王韓信が喜んでいて。そこで、張良が山の高いところで鉄笛を吹き、楚の歌声を歌わせた。それを聞いた楚軍の者が皆そのために悲しんでいた)

ここでは「簫」ではなく、「鐵笛」となっている。「笛」はまた「簫」や「笙」と異なり、まったく別の楽器である。「笛」は「横笛」と「豎笛」に分かれている。『和漢三才圖會』によると、横笛は通常「笛」という。豎笛はまた「尺八」ともいう。尺八が外観では洞簫と区別しにくい。両者は皆四つの穴があり、底がない。またともに吹き方も同じく縦吹きである。一般的に言えば、尺八が江戸の人々には非常に馴染んでいる楽器であり、簫や笙よりは庶民にわかりやすい。単なる絵を鑑賞するのは江戸に人々にはそれが「尺八」として受け止める人が多いであろう。

北斎の「張良吹簫図」よりやや遅れて、文化元年～三年(AD.1804-1806)に刊行した曲亭馬琴撰、北尾重政(元文4～文政3、AD.1739-1820)画の『絵本漢楚軍談』に一枚の挿絵「無題」[張良吹簫散楚兵]が見られる。『絵本漢楚軍談』巻六(三編巻之下)には「乍分龍準山河秀、初點重瞳日月明」という対句があり、その後

甲子夏孟重簫於繡像漢楚軍談端

曲亭子録

との署名がある。すなわち瀧沢馬琴(曲亭子)が文化甲子(元年、AD.1804)の夏に再編纂したもので、前掲の葛飾北斎の肉筆絵「張良吹簫図」より6年間遅れた作品である。この絵も『西漢演義』にある「張子房悲歌散楚」を真似たものである。北斎の「張良吹簫図」と比べ、画面の左上の半分は張良が洞簫(または尺八)を吹いている姿が描かれていて、より「張子房悲歌散楚」に近い。右と左下の半分には重政のアレンジが見られる。右の半分は大きな屋敷に項羽と虞姫が座って話し合っている様子である。左下の部分は大將軍桓楚と大將周蘭と数人の兵士が屋敷の外に立って敵陣の様子を見回っている、あるいは遠くからの楚の歌声を聴いている様子である。これはおそらく桓楚と周蘭が楚兵の大半が脱走したことに気づき、二人が項羽に報告した後の場面である。画面の右の部分に次のような内容が書かれている。

張良 その夜 雞鳴山のいただきにのほり、洞簫を吹いて一曲の楚歌を口くり、かねて数百人乃士卒にをしへたとにちりてうたはしめけるに、その響、或清和して恨むがごとく、うつたふるがごとく、聞人不覺の涙にむせびてしきりに古郷なつかしく八千の子弟おののくに抜いでて十が八九はおちうせたり。

北尾重政の後に月岡芳年(天保10～明治25、



図版7：北尾重政絵「張良吹簫図」
 (『絵本漢楚軍談』第五編 早稲田大学図書館所蔵)



図版8：月岡芳月絵「雞鳴山の月」(国会図書館所蔵)

「子房 雞鳴山の月」(国会図書館所蔵, 岩切友里子編『芳年「月百姿」』, 東京堂平成22年9月)に描かれているのも洞簫(又は尺八)であると推測される。要するに、浮世絵の中には「張良吹簫図」と称するものは二種類あると考えられる。その一種類は張良が笙を吹いている構図である。もう一種類は張良が洞簫(又は尺八)を吹いている構図である。

三、絵本『漢楚軍談絵尽』と年画『張良吹簫破楚軍』

ところで、北尾重政にもう一枚の「張良吹簫図」がある。それはすなわち『漢漢軍談絵尽』(明和3年, AD.1766)の挿絵である。ただし、この絵には張良の姿が見られない。画面の左側は項羽が酒を飲みながら、一休みをしている。一人の侍女が酒の熱燗を手にし、項羽の飲み終わるのを待っている。項羽のそばに虞姫が琴を弾いている。画面の右側に城

壁の外に漢軍の兵士たちが楚歌を歌っている。一人が涙を流しながら歌っている。城壁の中に楚軍の兵士たちが静かに聞きながら、故郷への思いがますます強まっているようである。明らかに、この「張良不在」の構図は「吹簫」より「悲歌」の方が強調されている。画面の右上に次のような内容が書かれている。

すわやとて漢の軍兵三百、八十万騎垓下の城を百重に囲み、四面にみな楚歌を歌ひけり、その以前、靈壁のいくさには高祖敗軍してわずか、その勢三百騎にはたらざりけり。その此とき高祖をかこめる、項王の軍兵は三百、八十万騎足けるがそれにひきかわり、項羽今乎ぜい百騎にもたらずして、城中に楚歌を耳にやると、天運循環なり。ここに項王寵愛深かりしく、しといへる美人あり、陣中までもとない給ひしか、項王こよいかぎりとおもひぬかればくしに琴をひかせ、その身もしつくりて心よく酒肴し給ひあるいは悲歌慷慨し給ふ、心のうちこそあわれなれ、もろこしに美人多しことにすぐれしは。

と、城内にいる項羽が楚歌を聞き、自分の天運が尽きたのを悟り、ついに戦意をなくしてしまったのである。

そのような「張良不在」の絵は偶然に中国の年画にもある。たとえば、天津楊柳青の年画「張良吹簫破楚軍」(劉見編著『中国楊柳青年画線版選』)という画題の絵には張良が描かれていない。この絵の画面の中心は項羽の軍営である。項羽が真ん中に座り、両側に部下と虞姫が座っている。一人の兵士が跪いて戦況を報告しているようで、庭に立っている兵士たちが不安げに中を覗いている。遠方に漢軍の兵士たちが立ったり、座ったりして、楚歌を歌っている様子。また、『中興傳志』卷三の楚歌に「孤雁声声叫婦去」という歌詞があるので、その影響を受けたかのよ

うで、一羽の雁が山から楚軍の陣営に飛んできて、さらなる悲愴な雰囲気強調される。さらに、絵の右上に次のような文字が記されている。¹⁵⁾

漢軍及諸侯兵圍項王於垓下。張良夜間吹簫作楚歌，令軍士四面歌之。項王聞之大驚曰，漢已得楚乎。何楚人之多也。項王有美人名虞，常幸從。駿馬名騅，常騎之。項王自爲詩，美人和之。項王泣數行下，左右皆泣。項王乃上馬，從者八百餘人，是夜潰圍而走。（漢軍及び諸侯の軍隊が項王を垓下に包圍した。張良が夜に簫を吹き楚の歌を作り，兵士たちに四面より歌わせる。項王が楚の歌を聴き，大変驚き，「漢がすでに楚を占領したか。なぜ楚の人がこれほど多いだろうか」と言った。項王には美人がおり，名が虞という。彼女がいつも項王についていた。また名馬がおり，名が騅という。項王がいつも乗っていた。項王が自ら詩を作り，美人がそれに唱和する。項王が泣くと，部下たちがみな泣いた。すると項王が乗馬して，部下の八百人余りと一緒にその夜に包圍網を突破して逃げた）

この内容はほぼ司馬遷の『史記』を写したもので，多少手加減したのである。この文章によると，張良が簫を吹き楚の歌を歌わせる（「張良夜間吹簫作楚歌」）ことがわかる。しかし，画面では張良が簫を吹くより，「四面楚歌」の雰囲気がより強調されているようである。この傾向は後に民国初期の蔡東藩が書いた歴史小説『前漢演義』により強まっていたと見られる。次に引用してみよう。¹⁶⁾

項王才就榻睡下，虞姬坐守榻旁，一寸芳心，好似小鹿兒亂撞，甚覺不寧。耳近又聽得淒風颯颯，鬢篋鳴鳴，俄而車馳馬驟，俄而鬼哭神號，種種聲浪，增人煩悶。旋復有一片歌音，逆響進來，如怨如慕，如泣如訴，一聲高，一聲低，一聲長，一聲短，彷彿九皋

鶴唳，四野鴻哀。（中略）究竟這歌聲從何而來，乃是漢營中張子房，編出一曲楚歌，教軍士至楚營旁，四面唱和，無句不哀，無句不慘，激動一班楚兵，懷念鄉關，陸續散去。就是鍾離昧，季布等人，隨從項王好幾年，也忽然變卦，背地走了。甚至項王季父項伯，亦悄悄的投攬張良，求庇終身。單剩項王親兵八百騎，守住營門，未曾離叛。（中略）虞姬在旁聽着，已知項王歌意，也即口占一詩道，漢兵已略地，四面楚歌聲。大王意氣盡，賤妾何聊生。（第三十一回「大將奇謀鏖兵垓下，美人慘別走死江濱」）（項王がようやくベッドで眠りついたが，虞姬がそばに座り，一寸の芳心が小鹿のごとく，どきどきして不安ばかり増している。耳に風や鬢篋の音が，ときには走っている馬車のごとく，ときには鬼神の泣き声のごとく，いろいろな音の波が人をイライラをさせる。しばらくしてまた歌声が入ってきた。その歌声は怨むごとく，慕うごとく，泣くごとく，訴えるごとく。高くなったり低くなったり，長くなったり，短くなったりしていて，まるで沼地で鶴が鳴いているようで，野原で鴻が哀れの声のようである。[中略]一体この歌声がどこから来たであろうか。それはすなわち漢軍の張子房が一曲の楚の歌を作り，兵士たちに教え，楚軍の周りで歌わせたからである。どれも哀れであり，どれも惨めである。楚兵たちを感動させ，故郷を思い，次々と脱走した。鍾離昧や季布たちでさえ，項王に長年仕えたが突然裏切り，こっそりと脱走した。さらに項王の叔父項伯までひそかに張良のところに逃げ込み，身の安全を求めた。項王の近衛軍八百人の騎兵だけが残り，入口を守り，裏切っていない。[中略]虞姬がそばで聞いて，すでに項王の真意が分かった。彼女もすぐその場で詩を作った。漢軍がすでに土



図版9：北尾重政絵「張良吹簫図」
(『漢楚軍談絵尽』, 東京都立図書館所蔵)

地を占領した。四面楚歌となった。王様が戦意を失い、私がどうやって生きていくのか)ここでは、張良が楚歌を作り、兵士たちにあちこちで歌わせ(四面唱和)、項羽の兵士たちだけではなく、部下の鍾離昧、季布や叔父の項伯までこっそりと脱走していった。項羽が完全に孤立にされてしまったことがよくわかる。



図版10：「張良吹簫破楚軍」(劉見編著『中国楊柳青年画線版選』)

四、おわりに

以上、「張良吹簫図」を考察してみた。要するに、二つの系統に分かれると言ってよい。その一つは張良が簫を吹いている姿が描いている図である。すなわち葛飾北斎の「張良吹簫図」をはじめとする作品である。北斎の「張良吹簫図」は『西漢演義』の「張良悲歌散楚軍」という図の大きな影響を受けている一方、訓訳本『通俗漢楚軍談』の訳文の理解に基づき必要な手入れをした。その結果、「悲歌」をより内容に沿っている「吹簫」に近づいたのである。

もう一つは張良が描かれていない図である。それは項羽と虞姫が画面の中心に置かれてい

るので、「四面楚歌図」と名付けた方がより適切かもしれない。北尾重政の『漢楚軍談絵尽』にある「張良吹簫図」はその類である。北尾重政の「張良吹簫図」は中国の影響を受けたかどうかは定かではないが、中国にもこのような類の絵が見られる。今のところ年画にはそのような作品「張良吹簫破楚軍」が存在しているのは確実ではあるが、年画以外はまだ分からない。

【注釈】

- 1) 永田生慈「張良図」一幅(『古美術』88号、三彩社1988年10月、118頁～120頁)
- 2) 『通俗漢楚軍談』卷之十二(元禄庚午[1690])

- 仲春夢梅軒章峯序，元禄甲戌〔1694〕称好軒南
徽庵跋，元禄八年乙亥〔1695〕三月（京都）刊
本）
- 3) 『通俗漢楚軍談』跋（同上）
 - 4) 明・甄偉『新刻劍嘯閣批評西漢演義傳』卷七
（万曆壬子〔1612〕刊本）。この本が最初輸入さ
れた時期ははっきりわからないが，大庭修『宮
内庁書陵部蔵舶來書目』（下，関西大学東西学
術研究所集刊七，昭和47年1月26頁）には，寛
保元年〔1741〕に輸入された記録がある。
 - 5) 『通俗漢楚軍談』卷之十二（同上）
 - 6) 『通俗漢楚軍談』卷之十二（同上）
 - 7) 『呂氏春秋集釋』卷五（新編諸子集成，中華
書局2009年9月，120頁～122頁）
 - 8) 明・王圻，王思義『三才図会』器用三之卷
（万曆丁未〔1607〕王圻撰「三才図会引」，万曆
己酉〔1609〕周孔教序，上海図書館蔵，上海古
籍書店影印本1988年6月，1120頁）
 - 9) 明・王圻，王思義『三才圖會』器用三之卷
（同上，1121頁）
 - 10) 寺島良安『和漢三才圖會』卷十八・樂器（東
京美術昭和45年3月，297頁）
 - 11) 明・甄偉『新刻劍嘯閣批評西漢演義傳』卷七
（同上）
 - 12) 『通俗漢楚軍談』卷之十二（同上）
 - 13) 岩切友里子氏の考証によると，明治17年に出版
された活字本『通俗絵本漢楚軍談』には北斎
画の『俗絵本漢楚軍談』を用いたという。（岩
切友里子編著『芳年「月百姿」』，東京堂平成22
年9月64頁）
 - 14) 『京板全像按鑑音釋兩漢開國中興傳志』卷三
（また『按鑑増補全像兩漢志傳』ともいう。鹵
清堂詹秀閩蔵板，萬曆乙巳〔1605〕冬月詹氏秀
閩梓行，名古屋蓬左文庫所蔵）
 - 15) 劉見編著『中国楊柳青年画線版選』（天津楊
柳青画社1999年7月，26頁）
 - 16) 蔡東藩著『前漢演義』上（上海文化出版社19
79年6月，264頁）
- 【図版】**
1. 葛飾北斎「張良吹簫圖」（『北斎美術館』第
5巻，集英社1990年12月）
 2. 「張子房悲歌散楚」（明・甄偉『新刻劍嘯閣
批評西漢演義傳』卷七，蘇州白玉堂天啟年間刊
本，周心慧『新編中国版画史図録』第7冊，学
苑，出版社2000年4月148頁）
 3. 「笙簫・韶簫」（明・王圻，王思義『三才圖
會』器用三之卷）
 4. 「洞簫」（寺島良安『和漢三才圖會』卷十八・
樂器）
 5. 「尺八」（寺島良安『和漢三才圖會』卷十八・
樂器）
 6. 「笙」（明・王圻，王思義『三才圖會』器用
三之卷）
 7. 北尾重政絵「張良吹簫図」（『絵本漢楚軍談』
第五編卷之下，江戸仙鶴堂文政12年刊本，早稲
田大学図書館所蔵）
 8. 月岡芳年「子房 雞鳴山の月」（国会図書館
所蔵，岩切友里子編『芳年「月百姿」』，
東京堂平成22年9月）
 9. 北尾重政「張良吹簫図」（『漢楚軍談絵尽』，
東京都立中央図書館所蔵）
 10. 「張良吹簫破楚軍」（劉見編著『中国楊柳青
年画線版選』，天津楊柳青画社1999年7月26頁）
- 【付記】**：本論文に引用した絵本の一部の文字内
容は高田真菊先生と白石真子先生の御教示によ
るものである。ここに感謝の意を申し上げたい。